

2017 年度
調査報告書

小学生のスポーツ活動における
保護者の関与・負担感に関する調査研究

目次

研究概要	1
調査報告	
1章 インターネット調査	3
1. 調査概要.....	5
2. 調査結果.....	8
3. 結果のまとめ.....	33
2章 母親に対するグループインタビュー	35
1. 調査概要.....	37
2. 調査結果.....	39
3. 結果のまとめ.....	47
3章 地域クラブ事例調査	49
1. 調査概要.....	51
2. 調査結果.....	52
3. 結果のまとめ.....	60
まとめと考察	61
参考資料	65

研究概要

1 研究目的

「親の都合で子供がやりたいスポーツができないなんて、バカらしいよ」

これは研究の過程でお会いした方が、悩む母親にかけられた言葉だが、そもそも本研究の契機となった思いもここにある。小学校期のスポーツは、多くの家庭においては「習い事」の1つとして捉えられ、保護者の意向が大きく関わってくる。子供本人が希望する「習い事」を、親の都合で諦めさせるというのは、決して珍しくない光景ではないだろうか。

特にスポーツ活動の場合、保護者にはさまざまな関与・支援が求められる(藤田 1995、永井 2010 など)。そのような状況を反映してか、母親に対する調査では、子供の音楽や芸術に関わる活動よりも、スポーツに関わる活動のほうが、「応援・手伝いの負担が大きい」という結果が出ている(ベネッセ教育総合研究所 2013)。また、渋谷(2016)は、「保護者の負担感やそれに伴うトラブルは現場での問題意識は高い」と指摘し、「保護者の支援体制を効果的にするための条件整備」の必要性を説いている。

このように、一方で保護者の関与・支援があつてこそ、子供のスポーツ環境が支えられてきた実態がある。他方で、そうした支援活動に対する母親自身の負担感が、子供のスポーツ活動参加を阻む要因になる可能性もある。

母親たちは、子供のスポーツ活動を支えることをどのように捉えているのだろうか。どのような点に負担、あるいはやりがいを感じているのだろうか。また、負担感の強い親のもとでも小学生が希望するスポーツができるためには、どのような環境が必要なのだろうか。本研究では、母親に対する調査を通してこのような問いを明らかにしていきたい。

※本研究では、「子供が団体(クラブ・教室等)に所属して定期的に行っているスポーツ活動」を「スポーツ活動」と略している。

2 調査設計

本研究では、以下の3調査を実施している。

- ① インターネット調査
- ② 母親に対するグループインタビュー
- ③ 地域クラブ事例調査

各調査の概要は後述する。

3 体制

本研究の企画・実査・分析は、以下の笹川スポーツ財団の研究員が担当した。

- ・宮本 幸子(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 研究員)
- ・山田 大輔(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 研究員)
- ・澁谷 茂樹(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主席研究員)